

重点項目	学力の向上	
重点課題	①授業の水準を高める。 ②生徒がテスト等によって学力を自己分析し、主体的に学習を進めることができるよう指導する。	
現状	①授業力の向上を目指して互見授業等を行い、教科別授業研究会の充実に努めている。 ②課題をこなすことに終始し、テストによる学力分析と事後対策が不十分な生徒が多い。	
達成目標	①互見授業を行い、授業力の向上を図るための教科別授業研究会の実施回数 各教科年間2回以上	②各種テストの見直しを行い、その後の学習計画を自主的に作成・修正し、実践できた生徒の割合(学習アンケートによる数字) 80%以上
方策	○互見授業を全教員に対し公開する。 ○互見授業終了後、教科別授業研究会を開催し、3年間を見通した指導法を築き、指導目標を共有する。 ○定期的に生徒の学力や学習実態を分析し、授業方法の改善をはかる。	○読解力・思考力・判断力・表現力等を育むような質の高いテスト作りに努める。 ○校内模試においてテスト解説授業を実施し、テストを見直す意識を高めるとともに、その後の学習の指針を示す。 ○テストの見直しにより、学習活動におけるPDCAサイクルの徹底を図る。 ○教師が常に自己研修に励み、担任や教科担当者による個別指導の充実を図る。 ○個々の学力に応じた教材について、研究開発をさらに進める。 ○新入生合宿で高校での学習法をしっかりと身につけさせる。
達成度	○各教科年間2回以上を実施した。	○テストを見直す意識が「強くなった」または「強くなった教科もある」と答えた生徒90% ○テストでできなかった分野の復習を学習計画に取り入れ実践しようとしている生徒74%
具体的な取組状況	<p>《互見授業》 1学期は各教科で互見授業を実施し、2学期は11月5日に新たな学び創造事業に係る公開授業において、のべ19名の教諭が互見授業を実施した。授業実施後には、教科別の協議会や授業研究会を持ち、授業力向上に向けた指導法の検討を行った。多くの教員が、自分の専門教科以外の授業も積極的に見直し、発表者に感想を伝えたと共に、自分の指導の参考とした。</p> <p>《テストの見直し、自主的な学習計画》 1年 ・定期考査、実力テストの後は、解き直しプリントを提出させている。再テスト、補習も実施している。定期考査等の既習範囲の問題を課題とし、復習させている。(数学) ・定期考査、実力テストのたびに、テストの見直しシートを提出させている。日頃の小テストを徹底し、直しを提出させたり、再テストを行ったりした。(英語) ・定期考査、実力テスト後の授業で、ポイントとなる問題について講評や解説を行った。国語通信を定期的に発行し、計画的に学習できるよう授業・考査範囲を早めに連絡したり、課題への有効な取り組み方を示したりしている。(国語) ・長期休業中の課題に効率的・計画的に取り組めるように、計画表の提出を休み前後で徹底し、担任面接でアドバイスをを行った。数学は課題チェック表を用意し、計画を立てさせた。</p> <p>2年 ・国語・数学・英語・理科において外部模試の試験見直し課題に分野別得点目標を設定し、目標をもって見直しさせた。 ・3学期以降、国語・数学・英語を中心に各外部模試や実力テスト向けに事前対策学習課題を課し、模試での目標を明確にさせて取り組ませている。 ・英語では3学期から普通科の土曜授業、通常授業において志望別展開授業を行っている。 ・2学期以降、国語と英語、数学で添削指導(自主課題)を行い、自主的な学習を促した。 ・長期休業前と終了後の面接を通して、学習計画とその取り組み状況を自己評価させた。 ・第4回、第5回実力テスト終了後に解説授業を2時間行い、テストの見直しを促した。</p> <p>3年 ・各進学模試終了後、『模試解説授業』を2～3時間行い、問題設定の狙い、解法の解説を行いテストの見直しを図った。進学模試や定期考査において各教科で解説・講評を配布したり、外部模試の答案の複写で自己採点して報告させるなど、できるだけすぐに解き直す習慣をつけさせた。 ・1学期末考査終了後、大学別に学習ガイダンスを行い、長期休業中に効果的な学習ができるように指導をした。7月、9月～11月に難関大講座等の特別講座を設け、学習支援を行った。 ・生徒の学力を学年会議において定期的に分析し、強化・補強を図った。担任による個人面接、教科担当による教科面接を行い、個々の現状に応じた助言をした。</p>	
評価	A	《互見授業》 各教科において2回以上の互見授業と教科別協議会が実施され、その概要が報告されており、生徒の主体的、対話的な深い学びを意識した授業方法の改善が検討されている。
	B	<p>《テストの見直し、自主的な学習計画》 1年 ・テスト後の見直しをしている教科は、数学(約75%)が3教科中最も高かった。できなかった分野を自主学習に取り入れている教科についても、数学が高かった。見直しができなかった理由として、次の課題や予習に時間をとられ十分に時間がとれないと感じている生徒の割合が高かった。今後もPDCAサイクルの確立を訴えていく必要がある。</p> <p>2年 ・「定期考査や実力テスト終了後、できなかった問題をどうしていますか」という設問に対して、数学で「一通り見直したり、解き直したりしている」割合が大幅に伸びており、復習の習慣が定着していることがわかる。 ・地歴、理科の見直しをする割合が上昇し、5教科型の学習に目が向いていることがわかる。 ・「実力テスト後の解説授業」について63%が「すぐためになっている」、34%が「少しためになっている」と回答しており、生徒の意識の改善に解説授業が役立っていると思われる。</p> <p>3年 ・「テストを見直す意識が強くなった」または「強くなった教科もある」生徒の割合は90%(昨年度88%)、「進学模試後の解説授業がためになっている」または「少しためになっている」生徒の割合は94%(同88%)であった。見直しをしたり、その後の学習に取り入れている教科は数学、理科、英語が多い。テストの見直しによって学習活動におけるPDCAサイクルが確立している生徒が増えた。</p>
学校評議員の意見	<p>《互見授業》 授業力向上のための効果的なプログラムである。どの程度水準が高まったかが見える評価法があってもよい。</p> <p>《テストの見直し、自主的な学習計画》 社会人になってからも、失敗を成長の糧にすることは大切なことなので学生時代から習慣づけることが望ましい。主体的な学習のため、個に応じた学習スタイルの視点が重要である。</p>	
次年度へ向けての課題	<p>《互見授業》 ・新学習指導要領が公示され、生徒の思考力、判断力、表現力を育てるための授業改善を続けていかねばならない。知識偏重にならないよう、ICT教材の利用やアクティブラーニングの手法の導入など生徒が主体的に授業に参加できる工夫をさらにすすめる必要がある。 ・教科横断を意識した授業展開をはかるためにも専門教科以外の授業見学を積極的に行う必要がある。</p> <p>《テストの見直し、自主的な学習計画》 ・生徒にテストの見直しを行なわせるためには「週末課題として課す」、「解説授業を行う」などの外発的な動機づけも必要である。生徒自ら課題を見つけ、自主的に学習計画を立てさせるために、担任や教科担当者が、長期的な見直しを持って、段階毎に具体的なアドバイスを絶えず与えていく必要がある。</p>	

重点項目	進路意識の高揚と進路希望の実現	
重点課題	①自己の将来像に連なる進路意識を醸成し、進路希望の実現をはかる。 ②第一志望をあきらめず、難関大学への進学をめざす意識を育成する。	
現状	①全員が大学への進学を希望している。大学などと連携した探究的な学習活動・体験の機会を活用する工夫が必要である。 ②自分の夢や希望を具現化するために、意欲的に情報を収集し活用する姿勢に欠け、進路選択が遅れる生徒が増加傾向にある。	
達成目標	①大学探訪・進路講演会に満足した生徒の割合 大学探訪 … 90%以上 進路講演会 … 80%以上	②希望する進路の実現を果たした生徒の割合 第1志望大学の合格率 … 50%以上
方策	○大学生活を具体的にイメージさせるために2学年の8月に大学探訪を行い、卒業生を招いて座談会を開く。3月には大学受験を終えた直後の卒業生既卒生を招き、大学生（先輩）に学ぶ会を行う。 ○将来の社会的・職業的自立に向けた一人一人のキャリア発達を促すために1学年の生徒に対し進路講演会を行う。事前に希望を集約して要望の多い分野から講師を招き、10分野以上の分科会を設置し実施する。また生徒が具体的に進路を考えられるように、講師は生徒にとって身近な存在として、本校卒業生を主に依頼する。	○面接指導や学年集会、および進路に関する行事を通して、早い時期から高い進路意識を持たせるよう指導する。また3学年では個別指導を特に強化し、生徒一人一人が志望大学の要求する学力に到達するように努める。 ○SSH事業等を通し探究的な学習活動・体験の機会を増やし、大学で何をするかについて具体的なイメージを抱かせる。
達成度	・大学探訪 99.0% ・進路講演会 94.7%	・前期日程合格率 46.0%
具体的な取組状況	<p>1年</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会の様々な分野で活躍されている方々を招いて、進路講演会を実施した。事前アンケートを参考に法律、行政、経済、心理学、報道、教育、理工、医学、薬学、国際等の分野から16分科会を設定し、生徒は希望する2分野の講演を聴いた。 ・探究科学科では、立山実習、能登臨海実習、県内企業・施設研修、「とやま賞」受賞講演への出席などを通して探究心を養うとともに、進路意識を高めることができた。 ・国際人育成と科学力養成を目的に、3月にはオーストラリア研修を予定している。 ・東京オリンピックのため、来年の夏の宿舍確保が困難であることから、大学探訪を3月17日～18日に実施する。 <p>2年</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学年懇談会（5月）において大学入試の概要などを伝えた。 ・夏期休業期間を利用して東京方面の大学探訪並びに企業訪問を1泊2日で実施し、174名が参加した。東京大学、お茶の水女子大学、一橋大学の見学や模擬授業、本校卒業の東大生との懇談会（宿舍にて）、三井住友銀行、清水建設、アクセンチュア、法務省など10の企業・省庁訪問を実施した。 ・夏期休業期間を利用して東京大学・富山大学で実験実習を行ったり、米国研修を実施するなど進路意識の高揚を図った。 ・3月に卒業生を招いて「大学生（先輩）に学ぶ会」を予定している。 <p>3年</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3年次の目標「夢を持ち、夢を夢のまま終わらせないための挑戦を続ける生徒の育成」を達成するため授業を大切に、粘り強い学習を日々繰り返していくことを呼びかけた。 ・7月には大学別の学習ガイダンスを実施し、夏季休業中に取り組んでほしいものやそれぞれの大学合格までの学習プランを紹介し、個人面接を通じてどのように学習するか担任と計画を立てた。 ・進学模試や定期考査を通じて、PDC Aサイクルでの学習を指導している。 ・7月と9月～11月の3か月に、各学習段階に応じた特別講座を開講し、学力の伸長を図るとともに、問題を通して各大学が求める学力水準を示した。 ・全教科にわたって、受験まで大学別添削指導を行っている。 	
評価	A	<p>《大学探訪》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・東京大学訪問は、オープンキャンパスではなく本校単独日程で行えたことや卒業生の協力による班別活動を行えたこと、本校卒業の現役東大教授による模擬授業を受けられたことなどによって満足度が高まった。 ・「OBOG東大生と語る会」は、卒業生の協力により中身の濃い内容となった。適切なアドバイスにより学習意欲が高まり、大学探訪の中で最も満足度の高い行事となった。 ・企業訪問は、本校卒業生の勤務する企業で、単なる見学ではなく、卒業生の企画したプログラムにより様々な体験ができた。実際にそこで働く人と会い、直接話を聞くことで質の高い経験ができた。 ・一橋大学、お茶の水女子大学ともに模擬授業やOB・OGとの座談会を行い、満足度の高いものとなった。 <p>《進路講演会》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の進路希望を参考に文系・理系にわたる幅広い分野（16分野）の講師を招き、10月上旬に開催した。 ・将来を見据えた適切な文理選択につながるとともに、目標・進路が明確になり、学習意欲が向上した。
	B	<p>《進路の実現》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国公立大学の平均倍率は2.8倍、合格率は36%であり、その数値は上回るが、達成目標には届かなかった。 ・難関国立大学の合格率は下記の通り。 東京大学48.3% 京都大学60.0% 大阪大学72.2% 名古屋大学36.3% 東北大学75.0% 北海道大学42.9% 東京工業大学66.6% 一橋大学0%
学校評議員の意見	<p>《大学探訪・進路講演会》</p> <p>大学入学後、社会人になってからの自分をイメージできることが進路選択の最も内的なモチベーションとなる。OB・OGの人材バンク化をすすめ、充実してほしい。</p> <p>《進路の実現》</p> <p>進学希望校への合格がゴールではなく、人生の目的や目標を達成するための通過点として実現されることを期待している。海外の大学進学があってもよい。</p>	
次年度へ向けての課題	<p>《大学探訪》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実施方法や内容は非常に充実したものになった。次年度以降も大学事務局や教授、OBとの連携を早期に取り、模擬授業や座談会の設定をすることが望ましい。 ・各企業訪問については、企業規模が大きくなればなるほど企業内の手続きが複雑になるため、前年度内から準備を始めることが望ましい。 <p>《進路講演会》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実施時期と形式は適切であった。講師も本校生徒の将来を真剣に考えてくれる素晴らしい方々であった。講師の方の集合時間を若干早めるなどして、機器の設定や学校側との打ち合わせの時間を取れば、初めて講師を引き受けて頂いた方にも丁寧な対応となると思われる。 <p>《進路の実現》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・志望大学に大きな変化が起こるのはセンター試験後であり、ここで生徒は現実的な判断をして、約半数の生徒が大学、学部、学科に変更を加える。「第一志望」を12月段階での志望大学としてしまうと今年度の第一志望大学合格率は17.4%となってしまう、この数値はここ数年の中でもいい数値である。 ・「第一志望をあきらめさせない」ことを行動目標とし、達成目標を「4月から12月まで志望大学を貫いた生徒の率60%」としたい。 	

重点項目	読書指導・体力の向上	
重点課題	①読書指導を充実し、図書館利用の広報周知を行う。 ②体力の向上に努めさせる。	
現状	①生徒には、読書を通じて自らの生き方や社会のあり方などを思索する時間が必要であるが、学校生活が多忙化し、なかなか読書の時間が取れていない状態である。 ②体力の低下が危惧される生徒が増えてきている。	
達成目標	①生徒への読書、図書館利用を促す広報刊行物の年間配布回数及び読書の時間の数	②2年次において、持久走の自己最高記録を更新した生徒の割合
	広報活動10回以上、 読書の時間年間15時間以上(1・2年)	70%以上
方策	○図書広報刊行物を月一回以上発行する。 ○読書の時間を計画的に確保する。また、年2回「読書会」を行う。 ○読書教養講座の実施や「本の虫」などの発行を通して図書委員による主体的な活動を行い、図書館への理解を深めさせる。	○全学年、体育の授業時に、毎時10分間程度のサーキットトレーニングを実施する。 ○前年度の自己記録を参考に今年度の自己目標を明確にし、体育の授業や部活動などで意欲的なトレーニングに結びつける。
達成度	広報活動30回以上 読書の時間 1学年 普通科・探究科学科15時間 2学年 普通科理系18時間、 普通科文系・探究科学科19時間	2年次において、持久走の自己最高記録を更新した生徒の割合 73.2%
具体的な取組状況	《読書・広報活動》 ・新入生に対して入学直後のLHの時間を利用して図書館オリエンテーションを実施した。 ・図書委員作成の「図書案内」を年12回発行し教室に掲示した。司書作成の「新着図書案内」を月2～3回、職員室前と図書館前に掲示した。 ・1年と2年の教室前廊下に「ミニ図書館」としてマガジンラックを置き、新着図書を紹介した。 ・図書アンケート結果と書籍を紹介する特集冊子「本の虫」を1月に全生徒に配付した。 ・図書委員会の活動や感想文・感想画の優秀作品を紹介する図書館誌「富山中部図書館」を3学期に発行し、全生徒に配付する予定である。	
	《読書・読書運動》 ・LHの中に読書の時間を設定し、担任と生徒が同じ本と一緒に読む活動を行っている。 ・8月と12月に、1年は読書会、2年はビブリオバトルと意見文作成を行った。そのまとめを図書館誌で紹介する予定である。 ・1学期に本校教諭による教養講座を実施した。講師は高志の国文学館に勤務経験があり、そこで企画担当した内容(宮本輝作品の魅力)や高志の国文学館にまつわるエピソードを聴くことができた。文学作品・作家・学芸員の仕事といった多岐にわたる視点で文学をとらえることができる講話で、多くの生徒が熱心に聴き入っていた。 ・文化祭で、読書会の記録の掲示(1年)やビブリオバトルの決勝戦(2年)、図書委員による企画展示(図書クロスワード・本の体育大会)などを行い、図書活動の活性化を図った。	
	《体力の向上》 ・サーキットトレーニングの意義について理解させトレーニング効果が上がるように実施した。	
評価	B	《読書指導》 ・全教職員の共通理解および図書委員の主体的な活動で、充実した図書活動を実施することができた。図書館利用者・本の貸し出し数は例年並みである。 ・昨年度から、読書の時間の本の選定の重要項目を「読みやすい」から「読ませたい」へ移行した。昨年度は本の難度が高すぎるといった意見が多かったが、今年度の必読図書は概ね好評である。
	A	《体力の向上》 ・継続して行ってきたことで、トレーニング効果が上がっていることを自覚することができ意欲的に取り組むことができた。
学校評議員の意見	《広報活動・読書運動》 読書を通じての「自らの生き方」「社会のあり方」への認識を深める意義は大きい。教科指導との連携にも取り組んでほしい。探究型の読書の成果を期待する。	
	《体力の向上》 目標を立ててやりきれば数字に反映されるという経験の繰り返しが生徒の自信につながっている。健康と体力作りのための意味づけをしてほしい。	
次年度に向けての課題	《広報活動・読書運動》 ・新校舎は図書館棟と教室棟が離れているため、生徒が図書館棟に足を運び、手軽に本を手にとってくれるような工夫を続けていく必要がある。 ・読書の時間の目的を再度確認し、本の選定を慎重に行う。	
	《体力の向上》 ・自己の体力、課題を把握し、積極的に取り組む姿勢の育成をはかる。 ・各自の体力に応じて、運動負荷の強度を設定する。	

評価基準 A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった

重点項目	学校行事・部活動の充実	
重点課題	①体育大会をより充実させる。 ②部活動を充実させる。	
現状	①体育大会へのあこがれが、本校への志望理由の一つになるなど、体育大会は、本校最大の行事として知られている。また、体育大会を通じて、生徒たちは人間的にも大きく成長している。 ②全校生徒に対し、いずれかの部に所属するよう勧めている。生徒は、学習と部活動を両立させるために、懸命に取り組んでいる。	
達成目標	①体育大会に充実感を持つ生徒の割合 *大会終了後に実施する、生徒会によるアンケート	②部活動に充実感を得た生徒の割合 *3年生全員を対象にした、8月下旬のアンケート
	80%以上	70%以上
方策	○体育大会の競技や応援の仕方について、生徒会を中心に改善を常にはかる。 ○競技の練習や準備活動が行き過ぎないように、適切な指導を行う。	○部活動への参加を積極的に促す。 ○限られた時間の中での、効率的な練習や活動を普段から考えさせる。 ○個々の生徒が学習と部活動のバランスが取れるよう、ホーム担任と部顧問が連携を取って指導する。
達成度	98.4%	99.6% ※アンケートは8月に実施
具体的な取組状況	《体育大会》 ・生徒会執行部員、各団の団役員生徒、教員との間で意見交換を積極的に行い、生徒主体の大会運営に努めた。 ・体育大会は天候悪化が心配されたが、予定どおり実施された。	
	《部活動》 ・年度末の活動場所や部室の清掃指導を実施した。 ・部活動の年間計画表を綿密に作成した。	
評価	A	《体育大会》 ・団役員生徒や生徒会執行部員らは、準備や当日の運営に対して精力的に取り組んでいた。
	A	《部活動》 ・週休日、平日に適切に休養日を設定し、学習と部活動の両立を考えながら部活動を行った。例年以上に全国大会に出場し、好成績を収めた生徒が多かった。
学校評議員の意見	《体育大会》 体育大会は富山中部高校魂が最高に発揮される場なのでこれからも工夫、改善してよき伝統を築いてほしい。	
	《部活動》 部活動は生徒の探究活動そのものである。豊かな人間性と人格の涵養のためにも継続的に支援してほしい。	
次年度へ向けての課題	《体育大会》 ・生徒の安全・健康面に配慮し、競技種目や全体練習の活動時間の短縮などを検討する。	
	《部活動》 ・部活動をとおして生徒が人間的に成長することを期待し、活動時間の徹底、部室前・部室内の清掃指導をより徹底して行う。	

評価基準 A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった

重点項目	「科学的思考力」と「自己発信力」の育成による「探究力」の伸長	
重点課題	①探究活動を計画的に実施して、科学的思考力を高める。 ②さまざまな研修や学術交流を通して、自己発信力を高める。	
現状	①これまで、探究科学科を中心に、野外実習や課題研究などのさまざまな探究活動を通して、科学的思考力の向上をはかってきたが、SSH指定校としてより計画的に「科学的思考力」を育成する必要がある。 ②海外研修などの研修・実習や学術交流に参加する生徒が増えている。	
達成目標	①-1 野外実習、大学実習に対するそれぞれの目標達成度 *各実習事後に実施するアンケート ①-2 探究活動のルーブリックによる評価	② 研修参加生徒に対する研修前後のアンケート結果の分析
	①-1 各90%以上 ①-2 レベル3に到達した生徒の割合80%以上	② 研修に参加した生徒の事後の自己評価アンケートで、自己発信力が向上した割合70%以上
方策	○野外実習や大学実習では、実習の内容や方法について十分に打合せを行ない、生徒が興味関心を抱き、積極的に参加できる工夫をする。 ○課題研究を探究活動と発表の2種類のルーブリックを用いて評価し、探究力の伸びをはかる。大学などとの連携をはかり、探究活動を充実させる。	○研修や学術交流に向けて積極的に自分の意見や考えを発信できる力を育てる工夫をする。 ○事後研修により、研修や学術交流を通して身につけた自己発信力の維持向上を図る。
達成度	①-1 野外実習…84%積極的に取り組めた 90%観察力が向上した 大学実習…96%満足できた ①-2 2月の最終評価でルーブリック評価の平均がレベル3に到達した生徒の割合…74% (理数科学科は78%)	①-1 アメリカ研修後、「外国人とコミュニケーションを積極的にとれるようになった」と回答した生徒の割合…77% ②-2 オーストラリア研修で自己発信力が向上した割合(平成31年3月)…100%
具体的な取組状況	《SSH事業》 ・野外実習では、観察力と課題設定力の向上を最大の目標として実施した。立山実習では事後指導を1日設定し、観察結果のまとめをさせた。臨海実習は2泊3日でゆとりある研修を実施した。文化祭において各班のポスター発表と代表班の口頭発表(スライド使用)を行った。 ・大学実習には、2年普通科の希望者も含めて40名(東大30名、富大薬学部10名)が参加し、各講座に分かれてそれぞれ3日間で実施した。その成果を文化祭においてポスター発表した。 ・2年探究科学科の課題研究では、富山大学の指導教官13名に指導を受けた。5月と10・11月に各ゼミの研究内容についての指導、1月の発表会では研究についての評価をしてもらった。 ・探究活動の評価に当たっては、生徒によるセルフ・アセスメント、教員によるルーブリックを用いた評価、さらに生徒との面接の実施や「探究ノート」の評価を取り入れ、適正かつ客観的な評価を心がけた。ルーブリックによる評価は、探究活動・発表の2種類を行い、評価の結果を面接などで伝え、生徒自身が次の目標を持てるようにした。	
	《海外研修》 ・アメリカ研修は、ポスト大学メインキャンパス学生寮に滞在しながら語学研修を行った。さらに最先端の科学技術にも触れ、世界各国からの留学生との交流も深めた。参加生徒は、自分自身や日本を見直すよい機会になると同時に、自己発信力を身につけることの重要性も自覚していた。 ・東北育才学校との交流は、今年度実施なし ・オーストラリア研修は、ニューサウスウェールズ州コフスハーバーのセントジョン・ポール・カレッジへの3度目の訪問となる。パートナー校との連携を強め、現地生徒やホストファミリーとの交流を深めるとともに、課題研究発表や科学的研修などを実施する。また、事前研修として、個人研究、パートナー校とのスカイプによる交流などを行っている。	
評価	B	《SSH事業》 ・野外実習のアンケートで「観察力が向上した」と答えた生徒が、臨海実習で98%、立山実習で75%だった。能登も立山も天候条件がよく、生徒は積極的に参加して実習の成果をまとめ、発表した。 ・課題研究のルーブリックによる評価と同時に実施している生徒のセルフ・アセスメントでは、自分の探究力を高く評価しており、探究力の伸長を実感していることがわかる。
	B	《海外研修》 ・アメリカ研修後に、プログラム全体を通しての満足度は100%となっている。また、「将来の夢や目標ができたか」の問いに対して87%が「そう思う」と回答している。参加生徒全員が本研修を後輩に薦めたいと回答しており、本研修が生徒にとって充実したものとなっている。 ・オーストラリア研修には定員の2倍以上の申し込みがあり、生徒・保護者ともに非常に期待度が高まっている。パートナー校での受け入れ状況が良好で、充実した研修内容となっている。
学校評議員の意見	《SSH事業》 生徒の自己評価が高いという点だけでも探究活動が充実していることがわかる。今後とも生徒自らの探究マインドを伸長させてほしい。	
	《海外研修》 研修参加者の満足度が高く、充実した研修が実施されていることがわかる。研修後もITなどを使って研修先とのコミュニケーションがとれれば一層の成果が出せる。	
次年度へ向けての課題	《SSH事業》 ・1年次のSS基幹探究では「探究モジュール」を取り入れ、しっかりとした基礎作りに取り組んでいる。2年次には大学の教官の指導も受け、本格的な探究活動を行い、3年次の発展探究βで英語での発信につなげている。3年間を見越し、一貫性ある効果的な指導体制や評価法について、さらに検討する必要がある。 ・ルーブリックによる探究活動の評価は、基準の内容を見直し、より使いやすいものとなるよう改善する必要がある。	
	《海外研修》 ・海外研修中の実践的なコミュニケーションが円滑に進むよう、事前研修を充実させる必要がある。 ・オーストラリア研修では自己発信力を高めるとともに、科学的思考力向上のため研修内容を改善しており、その成果が期待できる。 ・参加者が研修で得た能力や体験を進んで今後の学校生活や将来に生かすこと、研修の成果を広く校内に伝える必要がある。	

評価基準 A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった